

フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(下)

—中国語・日本語の視点から—

A Methodology for a Contrastive Study of Causative Expressions in French(Part 2)

: From the Point of View of Chinese and Japanese

成戸 浩嗣 Koji Naruto

(現代マネジメント学部)

抄 録

「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上) — 中国語・日本語の視点から —」(『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号所収)を参照。

キーワード

1. 使役 causative 2. 放任 noninterference 3. 許容 permissive
4. 受益 benefit 5. 受け身 passive

目 次

- 1 他動詞表現と“faire/laisser+不定詞”表現
 - 1.1 操作使役と指示使役
 - 1.2 使役形式のプロトタイプ
- 2 “faire/laisser+不定詞”と使役
 - 2.1 使役と放任
 - 2.2 状態性を帯びた“laisser+不定詞”
 - 2.3 使役者・被使役者の意志性
- 3 “faire/laisser”の機能語的性格
 - 3.1 “faire/laisser”と不定詞の結びつき(以上、『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号)
 - 3.2 他動詞化の手段としての“faire/laisser+不定詞”(以下、本号)
- 4 フランス語の使役表現と日本語の使役表現・受益表現
 - 4.1 “faire/laisser+不定詞”と「V(サ)セテアゲル/テクレル/テモラウ」
 - 4.2 “faire/laisser+不定詞”と「Vテモラウ」
 - 4.3 “se faire+不定詞”と「Vテモラウ」
- 5 おわりに

3.2 他動詞化の手段としての“faire/laisser+不定詞”

3.1では、“laisser+不定詞”表現を“faire+不定詞”表現と感覚動詞を用いた表現との中間的性格を有するものと位置づける考え方を提示し、“laisser+不定詞”を使役形式の一種とするか否かによって、“laisser”の位置づけも、機能語としての性格を強く帯びた成分、本動詞に極めて近い性格

を有する成分 or 本動詞のように変わってくるといふ予測を行なった。但し、いずれの考え方をとるかにかわらず、“laisser”が“faire”と同じく機能語としての性格を強く帯びる場合があることを忘れてはならない。それは、いわゆる「自動詞の他動詞化」に関わる場合である。六鹿 2016:354は“faire+不定詞”を用いた

(63) Ce film **a fait pleurer** le monde entier.

(この映画は世界中を泣かせた。)

(六鹿 2016:354)

について、「不定詞が自動詞の使役構文では、あたかも <faire+不定詞> がひとかたまりの直接他動詞のようになり、後ろに直接目的語として不定詞 (pleurer 泣く) の意味上の主語 (le monde entier 世界中) を置きます」とし、泉 1989:158-159 は

(64) Je **fais chanter** Taro.

(私は太郎に歌わせる。)(泉 1989:158)

(64)' Je **laisse chanter** Taro.

Je **laisse** Taro **chanter**.

(私は太郎に歌わせておく。)(同上)

のような自動詞 “chanter” を用いた表現例を挙げ、「faire もしくは laisser と結びついて一種の他動詞的なものを形成していると言ってよいでしょう」としている。上記の表現例を日本語の側からみると、日本語には「泣か**セル**」、「歌わ**セル**」という使役形が存在するため、“faire pleurer”、“faire/laisser chanter” についても同様に使役形式と解され、日本語の使役形式も他動詞化の一種であるとはいうものの、語のレベルにおける「自動詞の他動詞化」というとらえ方はされにくいのではなかろうか。語レベルの他動詞化とは、『応用言語学事典(「使役」の項)』が、自動詞文の「シャツが乾く」に対する他動詞文として「太郎がシャツを乾かす」を挙げ、後者は「シャツが乾く」という事柄を「太郎」が生じさせるのであるから一種の使役文であり、「kawak-as-u(乾かす)」は、「kawak-u(乾く)」における自動詞語幹「kawak」に「-as」という使役の助動詞に似た形がついたものであるとしているように、語の内部構造において観察されるものであろう。ちなみに同書は、このような現象について、「自動詞から他動詞が派生される他動化であるが、この他動化文と使役文とは相補的な関係にある」としている。そもそも、日本語の「歌う」は他動詞とされるのに対し、フランス語の “chanter” は他動詞、自動詞のいずれとしても働くとされており、NHK2014 年 3 月:79 においては

(59)' Je **fais chanter** cette chanson par Manon.

の “chanter” は他動詞、

(59) Je **fais chanter** Manon.

のそれは自動詞と示されている。このため、「他動詞・自動詞」という用語のあつかいにも慎重さが求められようし、「自動詞の他動詞化」といっても日本語とフランス語では意味が異なる可能性がある³⁵⁾。日本語話者からみてフランス語自動詞の他動詞化が際立つのは、日本語では自動詞、他動詞のペアが存在するのに対し、フランス語では他動詞がなく自動詞のみが存在するケースであろう。代表的なものとしては、2.3 でもとり上げた “tomber” が挙げられ、辞書にも “faire/laisser tomber” の形で収録されている。“tomber” とは異なり、“cuire(焼く・煮る/焼ける・煮える)”、“rôtir((肉などを)焼く/(肉などが)焼ける)”、“chauffer(暖める・熱する/暖まる・熱くなる)” の場合には他動詞、自動詞いずれの用法も存在する一方で、“faire cuire”、“faire rôtir”、“faire chauffer” の形も存在し、他動詞の “cuire”、“rôtir”、“chauffer” との間に何らかの使い分けがあると考えられる。『ディコ仏和辞典(“cuire” の項)』が、人が主語の場合には他動詞の “cuire” より “faire cuire” の方が多く用いられるとしていることから、これらの現象が 1.1 であつかった他動詞、“faire+不定詞” の使い分けの問題としてもとり上げられる可能性がみてとれる。一方、『フランス文法大全』:311 に挙げられている

(65) Nous **faisions rôtir** les pommes.

/私たちは林檎を焼け**サセタ**(焼いた)。

(『フランス文法大全』:311)

のような対応例からは「使役化→他動詞化」の過程がみてとれ、

(66) Les pommes **rôtissaient** devant le feu.

(林檎が火の前で焼けていた。)(同上)

のような自動詞表現と比べた場合には他動性の高さが際立つこととなるものの、“rôtir” が他動詞として働くケースに比べると働きかけは弱いと推察される。この点は、『最新フランス語大辞典(“rôtir” の項)』が、他動詞 “rôtir” の働きについて “faire cuire à la broche ou au four” のように、“faire cuire” よりも積極的な行為として示していることと、自然に焼けるように仕向ける行為を表わす

(67) J' ai fait cuire des patates douces au feu de bois et je les ai mangées.

(サツマイモをたき火で焼いて食べました。)

(『会話作文 フランス語表現辞典』「やく(焼く)」の項)

のような表現例とを比較することによっても理解できよう。一方、“voir”は他動詞であり、“faire/laisser voir”は成戸 2016 a :29 で紹介した奥津 1987:239 の記述にみられる「見セル」の場合と同様に、他動詞をさらに他動詞化したものであるという見方も不可能ではない。“faire/laisser tomber”、“faire/laisser voir”は“faire”、“laisser”のいずれを用いるかによって意味やニュアンスが異なり、この点は、2.3 で紹介した『プチ・ロワイヤル 仏和辞典(「おとす」の項)』の“faire/laisser tomber”についての記述や、『ディコ仏和辞典(“faire/laisser/tomber”の項)』が“faire tomber”を「落とす」、「laisser tomber qn/qch」を「(うっかり)落とす」とし、“faire voir qch à qn”を「(人)に…を見せる[分からせる]」、「laisser voir qch」を「…を(隠さずに)見せる、あらわにする」としてあることによっても理解できよう。

また、“faire+不定詞”の場合とは異なり、同じく“laisser+不定詞”形式をとる成分であっても、いかなる動詞が不定詞の位置を占めるかによって“laisser”と不定詞との結びつきの強さには差異がみられるようである。辞書において“laisser +不定詞”の形でしばしば収録されているもの、例えば『ディコ仏和辞典(“laisser”の項)』に挙げられている“laisser tomber qn/qch”、“laisser voir qch”をはじめとして“laisser aller qch(…をなるがままにまかせる)”、“laisser faire qn/qch(…にまかせておく、やらせておく)”、“laisser passer qn/qch(…を通す;見のがす、大目に見る)”などはまとまった一つの意味を表わし、“laisser”と不定詞の間に他の成分が入らない(or 原則として入らない)結びつきの強い成分であって、通常の“laisser+不定詞”表現とは異なっていると推察される。このような現象からは、中国語における“词(語)”と“词组(連語)”の相違を連想させられる。すなわち、“理发(散髪する)”、“洗澡(入浴する)”、“睡觉(ねむる)”などはいずれも一つのまとまった意味を表わす反面、中間に他の成分を挿入することが可能であり“词组(連語)”と認定される³⁶⁾のに対し、他の成分の挿入

が許されない場合には、そうでない場合に比べて一体性が強く、“词(語)”と認定される。“laisser”を用いた上記の成分が、不定詞との間に他の成分の挿入を許さないのであれば、そうでない場合に比べて“laisser+不定詞”の一体性がより強く、助動詞とされることもある“faire”の場合と同様に、“laisser”の機能語としての性格もより強いといえることができる。3.1 においては、“laisser+不定詞”の非使役形式あるいは非典型的な使役形式としての側面、“laisser”の動詞としての性格に着目して考察を行なったが、「他動詞化」にみられるような機能語としての働きに着目して“faire”との相違をみていくことも重要であり、こうした両面からの観察によってはじめて“laisser + 不定詞”表現の働きについての厳密な記述が可能となるのである。

4 フランス語の使役表現と日本語の使役表現・受益表現

4.1 “faire/laisser+不定詞”と「V(サ)セテアゲル/テクレル/テモラウ」

1～3においては、フランス語の“faire/laisser+不定詞”表現を主たる考察対象とし、フランス語の他動詞表現や感覚動詞を用いた表現、日本語の他動詞表現や「V(サ)セル」表現、「V(サ)セテオク」表現、使役を表わす中国語の“叫/让/给・N+V”表現との対応関係あるいは用法の比較を通して、その特徴を明らかにするための着眼点や分析方法、予測される結論について述べた。日本語の使役形式としては主として「V(サ)セル」をとり上げたのであるが、

(1) Je vais te **faire voir** quelque chose d'intéressant.

／面白いものを見セテアゲル。

(『コンサイス和仏辞典』「みせる」の項)

(18) Elle a pris la vieille dame par la main et l' a fait **monter** dans le train.

／彼は老婦人の手を取り列車に乗セテアゲタ。

(『プチ・ロワイヤル和仏辞典』「のせる」の項)

- (2)' **Laisse-les voir** ton album de photos.
 /彼らに君のアルバムを見**セテアゲ**なさい。
 (『21世紀フランス語表現辞典』:477)

のような「**テアゲル**」を用いたケースも存在する。
 「**テアゲル／テクレル**」を用いた対応例としては、

- (68) Attends, je vais lui **faire** manger sa bouillie.
 /待って、私が彼女におかゆを食べ**サセテアゲ**ましょう。
 (『21世紀フランス語表現辞典』:385)

- (69) **Laisse** ton petit frère s'asseoir près de la fenêtre.
 /弟を窓のそばに座ら**セテアゲ**なさい。
 (同上:475)

- (70) Sa lettre ! ... N'aviez-vous pas dit qu'un jour peut-être, vous me la **feriez** lire ?
 /彼の手紙ですか！…いつか読ま**セテクレル**とおっしゃったことがありましたね。
 (戸部篤 1997:23-24、雑誌『ふらんす』(白水社)所収の映画シナリオより)

- (71) Il m'a **laissé** partir en voyage sans mot dire.
 /彼は何も言わずに私を旅立た**セテクレタ**。
 (『プチ・ロワイヤル仏和辞典』“laisser”の項)

のようなものがあり、“faire/laisser+不定詞”形式のフランス語表現に対して「**V(サ)セテアゲル／テクレル**」形式の日本語表現が対応することはめずらしくない。先行研究の中にはこの点について特に言及することもないまま“faire/laisser+不定詞”の用法を論じているものが少なくない³⁷⁾。しかしながら、“faire+不定詞”、“laisser+不定詞”の使い分けを明らかにするためには、「**V(サ)セル**」、「**V(サ)セテアゲル／テクレル**」いずれの形式をとる日本語表現との間に対応関係が成立しやすいかをさがることが大いに参考となるように思われる。この点に注意をはらいつつ両形式の使い分けを明らかにしていくことは、それぞれの働きについての記述を従来よりも一層厳密なものとするにとどまらず、フラ

ンス語話者が日本語の使役表現、受益表現を正しく理解し、適切に運用できるようになることにもつながるであろう。

成戸 2016 b :29 においては、「**N・ニ V(サ)セテアゲル／テクレル**」に対応する中国語の表現形式として“**叫・N+V**”、“**让・N+V**”をとり上げ、両形式には使役者による働きかけの強弱や被使役者の意志性の有無あるいは強弱が一定の傾向ながらも形式上の相違に反映されており³⁸⁾、後者の方が「**N・ニ V(サ)セテアゲル／テクレル**」との対応関係が生じやすいと推測した。このことは、被使役者に対する利益の授与が明示されていることによって「**N・ニ V(サ)セテアゲル／テクレル**」との対応関係が成立する“**给・N+V**”の場合とは異なり³⁹⁾、“**让・N+V**”は被使役者の意志に沿うことにより結果的に利益となる使役が暗示されていることによって「**N・ニ V(サ)セテアゲル／テクレル**」との対応関係が成立するのであるが、“**叫・N+V**”についても「**N・ニ V(サ)セテアゲル／テクレル**」との対応関係成立の可能性を最初から排除すべきではないという考え方を前提としている。このような考え方をする理由としては、成戸 2016 b :28-30 で述べたように、使役と受益が一体化した“**给・N+V**”は使役形式としての完成度が低く限定的な範囲で成立するととどまること、使役表現の典型的形式であり、かつ被使役者に対する利益・不利益を考慮しない“**叫・N+V**”については、同じく典型的形式である“**让・N+V**”との間に用法上の明確な境界を見だし難いことが挙げられ、このことは、同:29-30 で述べたような、“**叫・N+V**”表現と「**N・ニ V(サ)セテクレル**」表現の対応例が存在することによっても理解できよう。

日中両言語の使役表現に対するこのようなあつかいは、フランス語の“faire/laisser+不定詞”表現を「**N・ニ V(サ)セテアゲル／テクレル**」表現と対照させる場合にも一定の有効性をもつと考えられる。この点を意識しつつ“faire+不定詞”表現、“laisser+不定詞”表現をながめてみると、2.3 で述べたように、いずれも使役者、被使役者双方の意志を問題とした「許容」を表わすことが可能であり、このことが「**V(サ)セテアゲル／テクレル**」表現との対応関係成立の一因であると考えられよう。『ディコ仏和辞典(“faire/laisser”の項)』に、行為の放任を表わす“laisser+不定詞”の働きが「(人に)…させておく、…させる、(人が)…するのにまかせ

る」によって示されているのに対し、使役を表わす“faire+不定詞”の働きが「…させる、…してもらう」とともに「…させてやる」によっても示されていることから、“faire+不定詞”が「V(サ)セテアゲル/テクレル」との間に対応関係を成立させることがみてとれるものの、使役者の働きかけのない放任を表わすとされる“laisser+不定詞”の方が、働きかけをとまなうことを前提とする“faire+不定詞”に比べて「V(サ)セテアゲル/テクレル」との対応関係が成立しやすいと推察される。このように、「V(サ)セテアゲル/テクレル」との間に対応関係が成立するといっても、“faire+不定詞”、“laisser+不定詞”には受益の意味が明示されているわけではないため、その主たる要因を他に求めざるを得ないのである。

ところで、日本語においては使役と受益がそれぞれ使役形式「V(サ)セル」、補助動詞「テアゲル/テクレル」という別個の形式によって表わされるのであり、成戸 2016 b : 28 で紹介したように、後者は談話機能上の働きに比重が置かれた成分であって文法的な働きをするものではないため、それが付加される前後で表現の前提となる客観的事実に変化はない。このことは、中川 1988:495 が、「てやる・てくれる・てもらう」の授受補助動詞構文は

- (72) [太郎が花子に[太郎がピアノをひく] S₂て
やった] S₁
(73) [太郎が花子に[太郎がピアノをひく] S₂て
くれた] S₁
(74) [花子が太郎に[太郎がピアノをひく] S₂て
もらった] S₁

のような複文構造をもち、S₂により示される埋込文がS₁の目的語となって、事柄の授受すなわち好意・恩恵の受給を表わすことになることとしていることからみてとれよう。一方、フランス語の“faire/laisser+不定詞”表現は中国語の“叫/让/给・N+V”表現と同様に上記のような複文埋込み構造をもたないため、表現全体が表わす内容と受益の意味との間に何らかのつながりがあるか、少なくとも矛盾がないことによって、「V(サ)セテアゲル/テクレル」との対応関係が成立する、あるいは許容されると考えられるが、「V(サ)セテアゲル/テクレル」のように受益を明示するものではない。

ついであるが、フランス語において受益が明示さ

れるケースとしては、どのようなものが存在するであろうか。受益が明示されたフランス語の表現形式の一つとしては、例えば“aider qn à+不定詞”があり、

- (75) **aider** un malade **à** monter dans une voiture
／病人を車に乗**セテヤル**(=テアゲル)
(『コンサイス和仏辞典』「のせる」の項を一部修正)

のような対応例がみられる。“aider(助ける)”は受益を内包した動詞であるため、「**aider** un malade **à** monter — 乗**セテヤル**(=テアゲル)」の対応関係が成立している。“aider”は積極的な働きかけをとまなう動作を表わす点において“laisser”と好対照をなしており、『ディコ仏和辞典(“aider”の項)』が、“aider qn à+不定詞”の働きについて「(人が…するのを)助ける」と示していることから、同形式を『誰かが何かをする』ことを『させる』というコトガラを表わす使役形式の一つであるとみること⁴⁰⁾、換言すれば「助ける」を「させる」の具体的な形であるとみることでもできそうである(そのようにみた場合は、操作使役、指示使役のいずれであるかという問題が発生する)。但し、“aider qn à+不定詞”表現に対しては、日本語の非使役表現が対応する

- (76) Je vais vous **aider à** transporter ces
paquets.
／この荷物を運ぶのを手伝っ**テアゲ**ましょ
う。(『ディコ仏和辞典』“aider”の項)

のようなケース、すなわち話者と相手が共同で行為を行なうことを表わすケースも存在する⁴¹⁾ため、“aider qn à+不定詞”が使役形式としての性格をどの程度備えているかについての厳密な分析が求められよう。“aider qn à+不定詞”以外にも受益が明示された表現形式は存在すると思われるが、この点については“faire/laisser+不定詞”を主たる考察対象とする本稿の目的からはずれるため、これ以上の言及は避けることとする。中川 1988:496 が、(72)～(74)のような分析例について、「英・仏語においては、必ずしもこのような複文埋込み構造を持つとはいえず、その点において、受給の関係を表すには、他の表現手段に頼らざるを得なくなる」としていることや、同:512 が、日本語では「本動詞+補助動詞

てやる・てくれる・てもらう」によって「プラス利益」、「マイナス利益」、「意志」、「許可・容認」、「希求」等さまざまな意味内容を表わしえるのに対し、英・仏語には恩恵の授受を表わすための補助的手段はなく、通常の動詞文に助動詞の助けを借りたり、他のいくつかの動詞(句)や名詞(句)・前置詞(句)等を組み合わせたりして恩恵の意味を表わさなければならぬとしていることから⁴²⁾、英語・フランス語における使役形式と受益形式の組み合わせが、日本語の「V(サ)セテアゲル／テクレル」の場合ほどの普遍性を有するとは考えにくい。後者が広く用いられるのは、「テアゲル／テクレル」が談話機能上の働きに比重が置かれた成分である点で「V(サ)セル」とは異なるため、両者の組み合わせに制限が少ないことによると推察される。同様のことは「V(サ)セテモラウ」にもあてはまるが、成戸 2015:83 で述べた「N(動作主体)・カラ／ニ Vテモラウ」の場合と同じく、同形式は利益の受け手について述べる形式、換言すれば話者の視点が受け手の側に置かれた形式である点で、利益の与え手について述べる形式の「V(サ)セテアゲル／テクレル」とは異なる。「V(サ)セテモラウ」については、竹島 2012:91、98 が、被使役者が望むことを使役者が許容する場合に「V(サ)セテモラウ」が用いられ、使役者の権限は感じられるものの、被使役者が恩恵を受けたということを表わすものとなるとしているほか、前田 1989:26 には「食べサセラレル」、「食べサセテモラウ」について、前者には強制・迷惑感が表わされているのに対し後者からは恩恵的なニュアンスが感じられる旨の記述が、中川 1988:508、益岡 2001:29 には「テモラウ」が「V(サ)セテモラウ」、「V(サ)セテイタダク」の形で許可あるいは許容を求める場合に用いられる旨の記述がそれぞれみられる。『21 世紀フランス語表現辞典』:475 には、

- (77) Si on pouvait **laisser** chacun faire ce qu'il veut !
／誰でもしたいことをサセテモラえたらなあ。(『21 世紀フランス語表現辞典』:475)

- (78) **Laisse-moi m'asseoir** près de toi, veux-tu?
／君のそばに座らセテモラっていいかな。
(同上)

のような“laisser+不定詞”表現、「V(サ)セテモ

ラウ」表現の対応例が挙げられているが、「V(サ)セテアゲル／テクレル」が対応するケースと同じく、使役者の働きかけのない放任を表わすとされる“laisser+不定詞”の方が、働きかけをとまなうことを前提とする“faire+不定詞”よりも「V(サ)セテモラウ」表現との対応関係が成立しやすいと考えられる。

4.2 “faire/laisser+不定詞”と「Vテモラウ」

4.1 で紹介した『ディコ仏和辞典(“faire”の項)』や、『小学館ロベール仏和大辞典(“faire”の項)』などの記述にみられるように、“faire+不定詞”表現に対しては「V(サ)セル」形式のほか、「Vテモラウ」形式をとる日本語表現が対応することがあり、

- (79) André lui **a fait** raconter une histoire avant de se coucher.
／アンドレは寝る前に彼にお話をシテモラッタ。
(『21 世紀フランス語表現辞典』:383)

のような対応例がみられる一方、“laisser+不定詞”表現の場合には

- (80) Pardon, voudriez-vous nous **laisser** passer, s'il vous plaît?
／すみませんが、通しテイタダケル(=テモラエル)でしょうか⁴³⁾。
(同上:475 を一部修正)

のような対応例がみられる。

このようなケースについて考察を行なうにあたっては、「V(サ)セル」との比較を通して「Vテモラウ」の働きを確認しておかなければならない。

周知のように「Vテモラウ」は受益形式の一つであるとされ、このことは中川 1988:511 が『てやる』『てくれる』『てもらう』の各文は、同じ一つの行為を、与え手、受け手、視点の所在という三つの観点から、それぞれ立場を変えて表現したものになぜないとしていることにもあらわれている。「Vテモラウ」は「Vテアゲル(テヤル)／テクレル」とともに受益表現の系列を構成する形式であり、前者においては利益の受け手に、後者においては利益の与え手に、それぞれ話者の視点が置かれるのである⁴⁴⁾。また、同:509 には、「ヤル」、「クレル」は受け身形

として「ヤラレル」、「クレラレル」という形態をもたないため、その埋め合わせとして「モラウ」を用いて受け身形に相当させていると考えることが可能であり、受給が対象語から主語(身内)の方向になされる点で、「デモラウ」表現は受け身表現と共通の性格を有する旨の記述がみられる。中川の記述からは、「Vデモラウ」が受益形式の一つに位置づけられると同時に、受け身形式としての性格をも帯びていることがみてとれる。このことは、中川が

- (81) 出サレタお菓子をおいしそうに食べた。
(中川 1988:509)
- (82) 出しテクレタお菓子をおいしそうに食べた。
(同上)
- (83) 出しデモラッタお菓子をおいしそうに食べた。
(同上)

について、「出サレタ」は「お菓子が出た」ことに受け手の希望が全く関与していないのに対し、「出しテクレタ」は「お菓子を出す」ことに与え手の意志が関わっており、「出しデモラッタ」は受け手が与え手に要求して「お菓子を出してもらった」の意味に解釈することができるとしていることに端的にあらわれており、受け手が与え手に要求したか否かによって「出サレタ」、「出しデモラッタ」が使い分けられていることが理解できよう。一方、『言語科学の百科事典(「ボイス」の項)』は、『デモラウ』は、使役や受け身相当の構造になることができる」とした上で、

- (84) a 太郎が弟子に仕事を手伝わセタ。
(『言語科学の百科事典』「ボイス」の項)
- (84)' b 太郎が弟子に仕事を手伝っデモラッタ。
(同上)
- (85) a 太郎が次郎にほめラレタ。(同上)
- (85)' b 太郎が次郎にほめデモラッタ。(同上)

の a と b は同じ構造といえるとしており、使役と受け身の連続性がみてとれる⁴⁵⁾。このような連続性はいかなる要因によるものであろうか。この点については、中川 1988 の以下のような記述が参考となろう。同:510 は、「いつの場合にも迷惑の受け身文と『てもらう』文とが置き換え可能かという、必ずしもそうではない」とした上で

- (86) 肩を強く叩かレタ(ので首筋が痛む)。
(中川 1988:510)
- (87) 肩を強く叩いてモラッタ(ので楽になった)。
(同上)

を挙げ、『てもらう』文の場合には、受け身にはない受け手の意志性が示されるという点において、受け身文と機能的に補い合う役割を果たしている⁴⁶⁾。つまり、授動詞構文(「てやる・てくれる」)においては、恩恵を与える行為は、その受け手の意志とは直接関係なくなされるが、受動詞構文(「てもらう」)においては、恩恵の受け手の意志の占める割合が、程度の違いこそあれ、重要になる」としている。これらのことは換言すれば、受け手の意志の有無あるいは強弱が、「Vデモラウ」表現、「V(ラ)レル」表現のいずれが選択されるかに影響するということであるが、これに類する現象が「Vデモラウ」表現、「V(サ)セル」表現の間にもみられるのではなかろうか。この点については、久松 2002:62 が

- (58) He **made** [had] his daughter work all day long.

のような英語の使役表現について「<make>には強制のニュアンスがあるが<have>を用いれば『人に～してもらう』というニュアンスを帯びる」としていることが参考となろう⁴⁷⁾。このようなニュアンスの相違が生じるのは、被使役者に対する強制度の点で“make”が“have”にまさっているためであろうが、この記述だけからでは“have”自身が「デモラウ」のような受益の意味を含意しているかどうかまでは読みとれない。“have”に対しては日本語の使役形式「V(サ)セル」を対応させることも可能であり、詳細な検討が必要とされるところである。被使役者に対する強制度の高低における“make”、“have”のこのような相違は「V(サ)セル」、「Vデモラウ」についてもあてはまると考えられ、強制度が高ければ前者を、低ければ後者を選択することとなる。このことは換言すれば、強制度が低くなるほど被使役者の意志が問題とされる可能性が高くなり、受け手の意志を問題とする「Vデモラウ」が用いられる可能性も高くなるということである。このように、「Vデモラウ」は「モラウ」の語彙的意味に由来する受益を表わす働きに加え、「V(サ)セル」、「V(ラ)レル」の働きとの間に連続性を有する形式であると考

えられる⁴⁸⁾。

使役形式、受け身形式のいずれの性格をも帯びた「Vテモラウ」の特徴は、

(88) Tu **as fait** réparer ta voiture ?

／君、車は直し**テモラッタ**(修理**サセタ**)?

(六鹿 2016:354)

における日本語表現に端的にあらわれているが、この場合には使役形を用いる特段の必要性がない限り、「直し**テモラッタ**」を用いるのが自然ではなかろうか。すなわち、コンテキストフリーであれば、「直し**テモラッタ**(=修理**シテモラッタ**)」で完結したコトガラを表わしていると感じられるのに対し、「直**サセタ**(=修理**サセタ**)」の場合には、「ダレニ」を補う必要性が感じられるのである。このような相違は、受け身との間に連続性を有する「Vテモラウ」が使役形式「V(サ)セル」に比べ、「ダレニ」の必須度が低いということに起因すると推察される⁴⁹⁾。また、「ダレニ」を用いた日本語表現が対応する

(89) J' **ai fait** réparer ma voiture **par** un autre garagiste.

／私は別の修理工場に車を修理し**モラッタ**。

(同上:355)

の場合には「修理**サセタ**」を用いることも可能ではあるものの、その場合には使役者の強制によるというニュアンスが際立つこととなる。ちなみに、六鹿 2016:355 には、(89)のフランス語表現が“par un autre garagiste”を欠いても完結した文として成立する旨の記述がみられ⁵⁰⁾、この点においても日本語の「V(サ)セル」表現とは異なることが理解できよう。また、

(90) J' **ai fait** bâtir une maison à[par] cet architecte.

／私はあの建築士に家を建て**サセタ**。

(『現代和仏小辞典』「使役・受身」の項)

(91) J' **ai fait** faire un vêtement à mon tailleur.

／私は洋服屋に服をつくら**セタ**。(同上)

のような対応例においては、使役を表わす「(サ)セ

ル」の働きを説明するために日仏両言語の表現を使役形式でそろえているという側面があるように感じられるが、(89)の日本語表現について述べたと同様のことがあてはまる可能性がある。「V(サ)セル」は“faire+不定詞”に相当する形式とされてはいるものの、両形式の間に必ずしも対応関係が成立するわけではないのである。

“faire+不定詞”表現との対応関係において「Vテモラウ」表現、「V(サ)セル」表現の相違が観察される例としてはこのほか、

(92) Je **fais** lire ce roman à mon fils par un professeur.

／私は先生に頼んでこの小説を息子に読み聞か**セテモラウ**。(目黒 2000:289)

(93) Je **fais** lire ce roman **à[par]** mon fils.

／私は息子にこの小説を読ま**セル**。(同上)

や、あるいは

(94) Je l' **ai fait** appeler par Bernard et je l' attends toujours.

／ベルナールに彼を呼ん**デモラッタ**んだけど、まだ待ってるんだ。

(『21世紀フランス語表現辞典』:385)

(95) Je le **ferai** venir.／彼を来**サセ**ましょう。

(『現代和仏小辞典』「使役・受身」の項)

が挙げられる。これらの日本語表現においては、コトガラに関わる二人の人物の関係(ex. 立場、年齢、地位など)にふさわしい形式が選択されており、選択にあたっては「Vテモラウ」、「V(サ)セル」間における受け手・被使役者に対する働きかけの強さや、受け手・被使役者の意志の有無あるいは強弱が密接に関わっていると考えられる。

“faire+不定詞”表現に対して「Vテモラウ」、「V(サ)セル」いずれの形式を用いた表現を対応させるのが適切であるかという点に着目して考察をすすめることにより、日仏両言語の各形式の働きを従来よりも詳細に記述することが可能となろう。“faire+不定詞”表現に対応する日本語表現が自然であるか否かの判断は、“faire+不定詞”表現の前提となる事実がどのようなものであるかによって微妙にゆれ

と思われるが、表現形式選択の主たる要因が何であるかを見極めることが大切である。「Vテモラウ」、「V(サ)セル」のいずれを選択するかの基準については、中川 1988 の以下のような記述が参考となろう。同:508 は、『てもらう』の基本的意味は、単に利益的行為の自主的取得としておくべきである。そしてその取得は、他人に働きかけて自分の要求を満たすものであってもよいし、要求せざるものであってもよい、「日本語では、ある一つの行為を、それがあたかも自分の方向へ向かってなされているかのように勝手に利益・恩恵を受け取ってしまう、受け手中心の表現が可能なのである」としており、受け手が実際に要求しているか否かにかかわらず、受け手が利益・恩恵を感じているのであれば「Vテモラウ」が選択されることがみてとれ、そうでなければ「V(サ)セル」が選択されることが考えられる。

“faire+不定詞”と「Vテモラウ」、「V(サ)セル」の対応関係をめぐる様々な情報からは、“faire+不定詞”の働きを分析するための新たな視点が得られる可能性があるが、ここで、“faire+不定詞”と「Vテモラウ」の間に対応関係が成立する要因について考えてみよう。前述したように、「Vテモラウ」は使役を表わすことに特化した形式ではなく、本来的な働きは受益形式としてのそれであり、受け身とも密接に関わっているため、典型的な使役形式とはいえない。これに対し、“faire+不定詞”は典型的な使役形式と位置づけることが可能であり、この点において両者は大きく異なっている。一方、3.1 の①、②および①’、②’に示したように、“laisser+不定詞”は“faire+不定詞”に比べると典型的な使役形式と位置づけられる可能性に乏しく、この点では「V(サ)セル」よりも「Vテモラウ」に近い性格を有するといえることができる。しかし、「Vテモラウ」の場合には中川 1988:508 の前掲記述にみられるように、受け手が利益・恩恵を感じていることが使用条件であるのに対し、“laisser+不定詞”にはそのような条件はなく、このことは「モラウ」、「laisser」の語彙的意味からも明白である。加えて、“laisser+不定詞”は「放任」を起点とする使役を表わし、使役者の意志はあまり問題とされないか全く問題とされないため、被使役者に対する要求を含意する可能性は低いとみるのが自然であろう。“laisser+不定詞”表現、「Vテモラウ」表現の間にみられるこれらの相違から、両者の間に対応関係が成立する可能性は極めて低いといえることができ、

(80)において両者が対応しているのは、依頼表現であることが大きく関わっていると推察される⁵¹⁾。“laisser+不定詞”とは異なり、“faire+不定詞”の場合には、使役者の意志が問題とされる点で、受け手が利益・恩恵を感じていることを使用条件とする「Vテモラウ」の特徴に通じるものがあるため、対応関係が成立しやすいと考えられる。

ところで、成戸 2015:83-84 では中国語の“请・N+V”表現をとり上げ、相手に動作・行為を願ったり要求したりするのに用いられることが多い「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現との対応関係について述べた。“请・N+V”表現はいわゆる「兼語式」に分類されており、“叫／让・N+V”などと同様に使役表現と位置づける記述も少なくない⁵²⁾。“请・N+V”表現においては、使役者が被使役者に対して要求をする(＝働きかける)こと、要求が実現すれば使役者が利益・恩恵を受けることが“请(頼む、お願いする)”の語彙的意味から明白であるため、「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現との対応関係が成立すると考えられる。これに対し、“faire+不定詞”表現の場合には利益・恩恵の授受とは無関係であるものの、2.3 で述べたように使役者から被使役者への働きかけを前提とする点で、“请・N+V”表現との間に共通点を有している。このため、“faire+不定詞”表現に対して“叫・N+V”表現が対応する

(96) On le **fait** travailler. / 人家叫他工作。
(《法汉词典》“faire”の項)

のようなケースのほか、“请・N+V”表現が対応する

(97) Il **a fait** venir le maçon.
／他请了泥水匠来。
(《新简明法汉词典》“faire”の項)

のようなケースがみられる。

以上のように、“faire/laisser+不定詞”を日本語の「Vテモラウ」、「V(ラ)レル」や中国語の“请・N+V”と比較することによって対応関係成立のメカニズムが明らかになると同時に、「V(サ)セル」、「V(サ)セテオク」、「V(サ)セテアグル／テクレル／テモラウ」あるいは“叫／让・N+V”、“給・N+V”と比較した場合には気づかなかった各形式の

細かな特徴がうきばりとなってくるのである。

4.3 “se faire+不定詞”と「Vテモラウ」

「Vテモラウ」との間に対応関係を有するフランス語の表現形式としては“faire+不定詞”のほかに“se faire+不定詞”があり⁵³⁾、“faire+不定詞”の場合と同様に『ディコ仏和辞典(“faire”の項)』、『小学館ロベール仏和大辞典(“faire”の項)』などにそのような記述がみられる。“se faire+不定詞”表現に対して「Vテモラウ」表現が対応するケースとしては、例えば以下のようなものが挙げられる。

- (98) Je **me suis fait** masser pas loin d'ici.
 /近くでマッサージをし**テモラッ**てたよ。
 (NHK2014年3月:76, 81)

- (99) Je **me suis fait** arracher une molaire par le dentiste.
 /歯医者で奥歯を抜い**テモラッタ**んだ。
 (『21世紀フランス語表現辞典』:387)

- (100) Nous **nous sommes fait** expliquer la route par un passant.
 /通りがかりの人に道を説明し**テモライマシタ**。(同上:386)

- (101) Je **me suis fait** aider par un ami dans mon déménagement.
 /私は友達に引っ越しを手伝っ**テモラッタ**。
 (『プチ・ロワイヤル和仏辞典』「もらう」の項)

- (102) Tu **t'es fait** faire ton tailleur par qui?
 /どの仕立屋さんにスーツを作っ**テモラッタ**の?
 (『21世紀フランス語表現辞典』:386)

- (103) Il **s'est fait** examiner par le docteur.
 /彼は医者に診**テモラッタ**。
 (『現代和仏小辞典』「使役・受身」の項)

このような対応関係に言及したものとしては、例えば『フランス文法大全』:312があり、使役動詞“faire”について『自分に、自分のために』の意の

ときには代名動詞の形になる」として

- (104) Il **se faisait** lire les journaux par sa fille.
 /彼は娘に新聞を読ん**デモラッテイタ**。
 (『フランス文法大全』:312を一部修正)

のような対応例を挙げ、『…してもらう』という日本語はこの形であらわされる」としている。“se faire+不定詞”表現が使役表現の一種であることは、久松 2002:64-65 が

- (105) Je **me suis fait(e)** photographier.
 /写真をとっ**テモラッタ**。(久松 2002:64)
- (106) Je **me suis fait** couper les cheveux par le coiffeur.
 /理容師に髪を切っ**テモラッタ**。
 (同上:65)

における“me”について、それぞれ「不定詞の直接目的補語『自分を～させる』になっている例」、「不定詞の間接目的補語『自分に～させる』になっている例」としていることや、六鹿 2016:358 が“se faire+不定詞”を使役構文の一種(再帰代名詞を伴う使役構文)と位置づけ、「主語は、自ら主体となって働きかけて『自分に(を)…させる、…してもらう』受益者になる場合と、主体的な働きかけのない単なる受益者、あるいは原因の場合があります。どちらの意味になるかは単語・文脈などによります」としていること、さらには、林 1987:49 が“se faire+inf.”構文について、「文法記述の慣例はこの構文を使役または作因の表現(causatif)に入れている」とした上で、

- (107) Je **me suis fait** couper les cheveux par un ami. (林 1987:49)

は「文の主体である『私』が『友人』に頼んで髪を切らせたことを語っており、使役を表わしている。ここでは主体は不定詞句の表わす動作や状態を引起こす者、つまり作因となっている」としていることによっても理解できよう。“se faire”は本質的には使役形式を構成する成分である点において、モノの授受を表わす動詞から派生した「**テモラウ**」とは異なるのである。このため、“se faire+不定詞”表現

に対して「V(サ)セル」表現が対応する

(108) Il **s'est fait** faire un costume par son tailleur.

／彼はなじみの仕立て屋にスーツを作らセタ。

(『ロベール・クレ仏和辞典』“faire”の項)

のようなケースも存在する。このように、“se faire + 不定詞”は使役形式と位置づけられる一方で、林が「se faire + *inf.* は、つねに主体が他者の動作の受け手であるという点では受動の表現の一つに数えられる」としているように、動作が使役者におよぶ場合に用いられるため、受け身とも密接な関わりを有する⁵⁴⁾。この点について『フランス文法事典(“faire”の項)』は、3.1で述べたように“faire”を使役の助動詞とする一方で、“se faire + *inf.*”については「主語が他人にさせた行為を自ら受けるから受動的意味をも表わす」としている。また、『フランス語ハンドブック』は、同:45において“se faire”の働きを「使役および受動を示す」とした上で、同:369では

(109) Elle **se fait** masser par son fils.

／彼女は息子にあんまをしテモラウ。

(『フランス語ハンドブック』:369)

(110) Elle **s'est fait** renverser par une vo

／彼女は車にはねとばサレタ。(同上)

のような対応例を挙げ、同じ“se faire + *inf.*”でも(109)のように意志的な「～してもらう」と、(110)のように非意志的な「～される」の2種類の表現が可能であるとする一方で、このような“faire”をいづれも使役動詞であるとしている。同様の記述が六鹿 2016:359にもみられ、“se faire + 不定詞”の受け身「…される」用法について、「意味合いは『受身』であってもあくまで使役構文」であるとするともに、『自分の過失、自分が原因』というニュアンスが含まれると言われることがあります。しかし実際にはそうでもなく、そのニュアンスによって受動態と使い分けることはまれです⁵⁵⁾、『人』が主語のものは、『受身』を表す構文として受動態よりも日常的に使われます。典型的には『被害、迷惑』の意味合いになります⁵⁵⁾。これらの記述からは、

“se faire + 不定詞”は使役を表わす働きを起点として、受け身の領域にまでその働きを広めていった形式であるということがみてとれ、この点において

(110)' Elle **a été renversée** par une voiture.

／彼女は車にはねとばサレタ。(同上)

のような受動態とは異なっている。

“se faire + 不定詞”と「Vテモラウ」の間に対応関係が成立する要因としては、いづれも使役および受け身に関わる表現形式であるということが挙げられる⁵⁶⁾。この点においては中国語の“叫／让・N + V”も同様であり、“叫”、“让”の原義からみて、“se faire + 不定詞”の場合と同様に、使役を表わす働きを起点として受け身を表わす働きをも備えるに至った形式であるとする考え方も従来からなされてきた。これに対し佐々木 1997:146-147は、“叫／让／给・N + V”形式の受動文の中には「使役行為の対象と使役者が同一であることから、同一語省略規則によってその対象が省略されるというプロセスを経て受動文が派生された」とする従来の考え方⁵⁷⁾によっては説明のできないケースがあるとして疑問を呈している。また、同:152には、使役と受動の解釈を決定しているのは主語(の表わす主体)が「事象の実現を目指す積極的な関与者」、「甘んじてその結果的影響を被る消極的な関与者」のいずれであるかということであり、前者の場合には使役文が、後者の場合には受動文が成立するのであって、“叫”や“让”自身に使役、受動の二つの構文を構成する機能があるわけではない旨の記述がみられ、同一語省略規則による説明にも限界のあることがみてとれる。

“se faire + 不定詞”、「Vテモラウ」、「叫／让・N + V」の使役、受け身を表わす働きを比較し、その共通点と相違点を明らかにすることによって、三つの言語において使役と受け身がそれぞれどのような形で連続性を有しているか⁵⁸⁾がうきぼりとなる。前述したように、“se faire + 不定詞”が使役を表わす働きを起点として受け身の領域にまでその働きを広めていった形式であるのに対し、「Vテモラウ」は4.2で述べたように、受益を表わす働きを起点として使役や受け身との間にも連続性を有するにいたった形式であり、それぞれの本来的な働きは異なるものの、両者の働きには重なる部分があるため対応関係が成立するのである。但し、“se faire + 不定詞”表現の中にも、使役を表わす働きが明確なも

のから、受け身表現に極めて近い性格を有するものまでが段階的に存在するようである。このことは、『フランス文法事典(“faire”の項)』が、“se faire connaître”は「名を名乗る」では使役的、「名を知られる」では受動的意味に近づくとしていることや、『フランス語ハンドブック』が前掲のように“se faire”は使役および受動を示すとする一方、同:316-317において

(111) Elle **s'est fait** couper les cheveux.
(彼女は髪を短く切らせた／切ってもらった。)(『フランス語ハンドブック』:316)

(112) Le patron **se fait** détester par ses employés. (主人は雇人に嫌われている。)
(同上)

(113) Elle **s'est fait** voler 1.000 francs.
(彼女は1000フラン盗まれた。)(同上)

を挙げ、「<faire+inf.>は『…させる、…してもらう』という使役の意味だが、<se faire+inf.>の場合は、受け身との区別が難しいことがある」とした上で、(111)では明らかに主語の意志が考えられるのに対して(113)は受け身的表現と考えられ、(112)はいずれであるかについての判断が微妙であるとしていることによっても理解できよう。(113)が受け身的表現と考えられる理由として同書が述べている「なにもわざわざ、盗まれるようにしたわけではないからである」からは、使役者の働きかけが弱ければ弱いほど“se faire+不定詞”表現の受け身的性格が強くなっていくことがみてとれる。また、日本語との対応関係においては、“se faire+不定詞”表現において使役、受け身のいずれの性格がまざっているかが「V(サ)セル」、「Vテモラウ」、「V(ラ)レル」のいずれと対応するかに影響をおよぼすということが予測される。「V(ラ)レル」との対応においては、いわゆる「迷惑の受け身」にも目配りをする必要がある。この点について町田 2015:171は、“se faire+不定詞”は『自分を(に)～させる、してもらう』という意味を表す」とした上で、「主語が受ける行為が、主語にとって迷惑だと思われる場合、日本語では『～される』のように受身形に置き換える」としている。「行為が迷惑であるか否か」は、言うまでもなく使役者あるいは受け手の側で判断さ

れることであり、この種の判断は場面や文脈などによって微妙にゆれることがめずらしくない。多くの表現例の中にはいずれとも判断しがたいケースが存在する可能性も大いに考えられる。ちなみに、迷惑であるか否かについての判断が微妙なケースとしては、例えば

(114) Je vais **me faire** arrêter par la police.
／私は自分を警察に逮捕**サセル**(=逮捕し**テモラウ**)つもりだ。(町田 2015:171)

のようなものが挙げられる。通常状況下では、逮捕されるのは不利益(迷惑)をこうむることであるが、使役者・受け手が意図してあえてそのようにさせるという場面であれば「逮捕**サセル**」、「逮捕し**テモラウ**」を対応させることも可能であろう。

「V(サ)セル」は使役を、「V(ラ)レル」は受け身を表わす形式であるのに対し、これまで繰り返し述べてきたように、「Vテモラウ」は受益を表わす働きを中心としつつ、使役、受け身にも関わる形式である。また、町田 2015:171の前掲記述からもみてとれるように、「Vテモラウ」、「V(ラ)レル」は、動作が受け手にとって利益、迷惑のいずれであるかによって使い分けられるのであり、このことは、受け手の意志の有無あるいは強弱がいずれの形式を選択するかに影響するという、4.2で述べたことと表裏一体をなしている。一方、フランス語の“se faire+不定詞”は、このようなことが問題とされない形式のようである。このため、“se faire+不定詞”表現が「Vテモラウ」表現、「V(サ)セル」表現の双方との間に対応関係を有するケース、「Vテモラウ」表現、「V(ラ)レル」表現の双方との間に対応関係を有するケースのほか、「Vテモラウ」、「V(サ)セル」、「V(ラ)レル」のいずれの表現とも対応関係を有するケースが存在することが想定され、それらの対応関係成立の可否についての確認を行なうとともに、成立する場合にはその要因を探っていくことで、“se faire+不定詞”表現をめぐる日本語との対照研究に新たな展開が期待できよう。“se faire+不定詞”表現と「Vテモラウ」表現、「V(サ)セル」表現との対応関係については、(111)や

(115) Il **se fait** comprendre.
／彼は自分の考えをわかつ**テモラ**おうとする(わから**セル**)。

(『フランス語ハンドブック』:45)

(116) Charlotte **s'est fait** maquiller par la styliste.

／シャルロットはスタイリストに化粧をし
デモラッタ(=サセタ)。

(町田 2015:171)

のような、“se faire+不定詞”に対して「Vデモラウ」、「V(サ)セル」の双方が対応するケースの分析を通して、“se faire+不定詞”表現を日本語に置き換えるに際しての「Vデモラウ」、「V(サ)セル」が選択される要因を探っていくこととなる⁵⁹⁾。4.2では、被使役者に対する強制度の高低が「Vデモラウ」、「V(サ)セル」のいずれを選択するかに影響し、強制度が低くなるほど被使役者の意志が問題とされる可能性が高くなり、受け手の意志を問題とする「Vデモラウ」が用いられる可能性も高くなるとしたが、この点もふまえて“se faire+不定詞”との対応関係について分析作業をすすめていくのである。同様に、“se faire+不定詞”表現と「Vデモラウ」表現、「V(ラ)レル」表現との対応関係についても、例えば

(117) Au début, il a eu du mal à **se faire** accepter.

／初めの頃は彼はなかなか受け入れデモラえなかった(受け入れラレなかった)。
(『21世紀フランス語表現辞典』:388を一部修正)

(118) Marie-Claude a réussi à **se faire** engager par Siemens.

／マリー＝クロードはうまくシーメンスに
雇っデモラッタ(雇わレタ)。(同上)

のような対応例について、迷惑であるか否かによる「Vデモラウ」、「V(ラ)レル」の使い分けを参考として分析作業を行なっていく必要があり、その場合には、六鹿 2016:359の前掲記述では言及されなかった“se faire+不定詞”と受動態との相違を確認しておくことも必要となってくる。藤村 1993:173の記述にみられるように“être+過去分詞”形式をとる受動文と“se faire+不定詞”をはじめとする周辺の構文との間には連続性がある一方で、形式が異な

るからには何らかの使い分けが存在すると思うのが自然なためである⁶⁰⁾。

ところで、“faire+不定詞”、“se faire+不定詞”いずれの表現に対しても「Vデモラウ」表現が対応するという現象⁶¹⁾については、これをどのように理解すればよいのであろうか。“faire+不定詞”、“se faire+不定詞”についての従来の記述では、いずれも使役形式であり、動作が使役者自身におよぶ場合には後者が用いられるという説明がなされるものの、

(119) J' **ai même déjà fait** envoyer le colis pour ma famille en France!

／フランスの家族に、もう小包を送っデモラッてたりするんだから!

(NHK2014年3月:76、81)

(98) Je **me suis fait** masser pas loin d'ici.

／近くでマッサージをしデモラッてたよ。

のような対応例をみると、“faire+不定詞”表現、“se faire+不定詞”表現の相違についてさらに詳しく分析を行なう必要性が感じられよう。すでに述べたように、前者は純然たる使役表現であるのに対し、後者は意味的には濃厚に受け身表現としての性格を帯びている。言うまでもなく、再帰代名詞を用いた使役形式は英語にはなく、例えば久松 2002:64-65は、「Aを～してもらう」に対応するフランス語、英語の表現形式として

S + **se faire** + *inf.* [+ A (物)]

S + **have**[*get*] + A (物) + [過去分詞]

を示した上で、

(105)' Je **me suis fait(e)** photographier.

／I **had** [*got*] a photo **taken**.

／写真をとっデモラッタ。(久松 2002:64)

(106)' Je **me suis fait** couper les cheveux par le coiffeur.

／I **had** [*got*] my hair **cut** by the barber.

／理容師に髪を切っデモラッタ。

(同上:65)

を挙げているほか、中川 1988:506-507も

(120) …, **se faisant** couper les cheveux par un camarade avec des ciseaux un peu rouillés.

／…, **having** his hair **cut** by a friend with a pair of slightly rusty hair clippers.

／…、友だちに少し錆ついたバリカンで頭を刈っ**テモラッ**ているところであった。

(中川 1988:506-507、『潮騒』)

を挙げている。これらの対応例において強制使役を表わすことが可能な“make”が用いられていないのは、受け身とも関わる“se faire+不定詞”、受益形式であると同時に受け身とも関わる「**Vテモラウ**」の働きを考えれば自然なことである。このことは、久松 2002:62 が「SはAに～させる」を表わすフランス語、英語の表現形式として示した

S + **faire** + *inf.* …[à/par] + A (人)

S + **make** [**have**] + A (人) + do

と対比させれば理解しやすいであろうし、『新英和中辞典(“make/have/get”の項)』に、

make + 目的語 + (動詞の)原形

は強制、非強制のいずれに用いることも可能であるのに対して

have + 目的語 + (動詞の)原形

はmakeほど強くない使役を表わし、さらに“get”を用いる場合には

get + 目的語 + 過去分詞

の形で「<…を><…>させる[してもらう]」、「<…を><…>される」を表わす旨の記述がみられることとも矛盾しない⁶²⁾。六鹿 2016:358 が“se faire+不定詞”について、「ふつうの使役構文とは違って、主語が強く働きかけて『…させる』主体である場合はあまり多くありません。むしろ、その対極のような『…される』という受身の表現としてよく使われます」としていることから、使役の強制度が“faire+不定詞”のそれよりも低いことがうかがわれる。このことや、“se faire+不定詞”表現が表わすコト

ガラに対して「使役者に向けて動作を行なわせる→使役者の意志に沿った動作を行なわせる→使役者の利益となる動作を行なわせる」のような連想が可能なのが、「**Vテモラウ**」表現との対応関係を支えているとみることができよう。但し、このように考えたとしても、(98)、(119)の相違について説明するには不十分である。二つの対応例は、原文では二人の登場人物による一連の対話中にあらわれたものである。これらの前提となる客観的事実をみると、“se faire+不定詞”形式をとる(98)の場合には動作、利益の双方が使役者におよぶのに対し、“faire+不定詞”形式をとる(119)の場合には、動作そのものは使役者におよばず、動作が行なわれることによって生じる利益が結果として使役者におよぶという相違がみられる。このことから、二つのケースをフランス語では異なる形式によって表現するのに対し、日本語ではいずれも「**Vテモラウ**」形式によって表現することが可能であり、“faire+不定詞”、“se faire+不定詞”いずれの表現も「**Vテモラウ**」表現との対応関係を成立させることがみてとれるのではなかろうか。但し、この点を論証するにあたっては、“se faire+不定詞”表現における再帰代名詞が不定詞の間接目的語であるケースが存在することを考慮に入れ、それとの矛盾がないようにしなければならない。『フランス語ハンドブック』:45の記述にもみられるように、同表現には“se”が直接目的語となっている

(121) Il **se fait** comprendre.

(彼は自分の考えをわからせる／わかってもらおうとする。)

(『フランス語ハンドブック』:45)

のようなケースのほか、間接目的語となっている

(122) Elle **se fait** couper les cheveux.

(彼女は髪をカットさせる／カットしてもらう。)(同上)

のようなケースがある⁶³⁾。“se faire+不定詞”表現のこのような働きの分類と、同表現を“faire+不定詞”表現と比較した場合の働きの相違とを混同してはならない。ちなみに、“se faire+不定詞”表現に対して中国語の使役表現を対応させた

(123) Il **se fait faire** un veston.

／他叫人(給自己)做一件上衣。

(《新簡明法漢詞典》“faire”の項)

においては、中国語表現に“給自己”が用いられており、“se fait faire”から受益の意味を読みとって反映させた形となっている。また、《法漢詞典》(“faire”の項)が“se faire(+inf.)”を“使自己被…”によって示す一方で、“se faire photographier／叫人替自己拍照”という対応例を挙げていることから、“se faire”に受け身、受益の意味を見だし、それを中国語に反映させたことがみてとれる⁶⁴⁾。“se faire+不定詞”表現と中国語表現の対応例としてはこのほか、“se faire voir qch. à qn／让某人看某物(《法漢詞典》“faire”の項)”、“se faire un costume par qn／让某人做一套衣服(同上)”がみられる。いずれも“让・N+V”表現が用いられているが、“叫・N+V”表現との対応関係が成立するかどうかについても確認し、成立するのであれば“让・N+V”表現と比較してその適格性の差異を調べる必要があろう。そうすることによって、“faire+不定詞”、“se faire+不定詞”および“叫・N+V”、“让・N+V”の4者を視野に入れた対応関係の傾向について厳密に記述することが可能となるのである。

5 おわりに

以上、フランス語の“faire+不定詞”表現、“laisser+不定詞”表現を中心に、日本語や中国語の使役表現との対照作業を行なうための着眼点や分析方法、予測される結論について述べた。

使役について考える場合、対象をどこまでに限定するかということがまず問題となる。本稿でとり上げたものについて言えば、“faire+不定詞”、“V(サ)セル”、“叫／让・N+V”といった典型的な使役形式とされるものに限定するのか、あるいは使役を表わす他動詞表現や“se faire+不定詞”、“laisser+不定詞”、“V(サ)セテアゲル／テクレル／テモラウ”、“Vテモラウ”、“给・N+V”、“请・N+V”のような形式をとる表現をも合わせてとり上げるのかということである。他動詞表現をとり上げる場合には、「操作使役」という概念が問題となるが、先行研究においては「強制使役・許容使役・放任使役」などと同一レベルであつかわれることがし

ばしばであり、これらの概念規定および位置づけを明確にした上で考察をすすめるなければならない。また、「V(サ)セテアゲル／テクレル／テモラウ」をとり上げたのは、「V(サ)セル」、「V(サ)セテアゲル／テクレル／テモラウ」の使い分けを視野に入れない限りフランス語、中国語の使役表現との対応関係成立の要因を厳密に記述することができないためであり、「Vテモラウ」をとり上げたのは、同形式が「Vテアゲル／テクレル」と同じく受益を表わす働きを有しつつ、使役や受け身を表わす働きをも兼ね備えているためである。さらに、“se faire+不定詞”をとり上げたのは、本来的には使役形式でありながら受け身を表わす働きをも備えている点において、使役、受け身との間に連続性を有する「Vテモラウ」に近い性格を有するためであり、“给・N+V”をとり上げたのは、使役、受益が一体化した形式である点で「Vテモラウ」との間に共通点を有するため、“请・N+V”をとり上げたのは、使役者から被使役者への働きかけを前提とする形式である点で“faire+不定詞”と共通しているためである。

これらの諸形式を比較しながら、考察の過程では感覚動詞を用いたフランス語表現や日本語の受け身形式「V(ラ)レル」にまで言及し、より詳細な分析が可能となるような方法を探った。考察対象をどこまでに限定するか、あるいはどこまで広げるかは、一つの言語を対象とするか、あるいは複数の言語をとり上げて対照研究を行なうかによって異なるであろう。しかしながら、使役形式をはじめとする様々な表現形式は、他の表現形式と無関係に存在するのではなく、互いに関連性をもちながら相補的に働いており、それらの働きが交錯することもめずらしくない。また、異なる言語間の対応関係を観察していると、対応関係が一对一で成立するのではなく、一つの表現形式が他の言語における複数形式との間に対応関係を有することが多い。従って、使役表現の考察においては、使役を表わす働きが典型的な使役形式以外の様々な形式によってもなわれること、使役にもいくつかの形態があるがそれらは相互に連続性を有すること、使役表現と非使役表現の間にも連続性があることなどを前提として作業をすすめる必要がある。

なお、本稿では“faire/laisser+不定詞”表現が無情物を使役者とするケースをとり上げなかったほか、フランス語の受動態については“se faire+不定詞”表現についての考察過程で最小限ふれるに

とどめた。今後の課題としたい。

注

- 35) 『フランス文法大全』:223 は、他動詞と自動詞の間に絶対的な境界を画しがたいとした上で、“passer”、“pleurer”、“réfléchir” が他動詞、自動詞としてそれぞれ働く例を挙げている。NHK2014 年 3 月:79 の記述によれば、“faire+不定詞”表現において他動詞を用いる場合には“faire+他動詞+直接目的語(+par/a 行為主体)”形式を、自動詞を用いる場合には“faire+自動詞(+直接目的語)”形式をとる。
- 36) この点については興水 1985:34 を参照。
- 37) 成戸 2016 a :35-36 で述べたように、中国語の使役表現を日本語のそれと対照させる場合にも「V(サ)セル」と「V(サ)セテアゲル/テクレル」を分けないことが多い。同様のことはフランス語の他動詞表現についてもあてはまり、(12)や “Je vais vous **montrer** ma collection de timbres. /あなたに私の切手のコレクションを見**セテアゲ**よう。(『ディコ仏和辞典』“montrer”の項)”のような対応例がみられる。
- 38) 成戸 2016 a :32 では“叫・N+V”、“让・N+V”間にみられる使役の強制度の差異についてふれた。
- 39) “給・N+V”が被使役者に対する利益の授与を明示する点については、成戸 2016 a :37、同 2016 b :29 を参照。『岩波 中国語辞典(“給”の項)』には、“給・N+V”表現は、対象に対し「…に…させる、…に…させてやる」という場合に用いられる旨の記述がみられる。この点については成戸 2016 a :38 でも紹介した。
- 40) 注 26 の小宮 1984:154 を参照。
- 41) ちなみに、“I **helped** the old woman down from the bus. /そのおばあさんに**手を貸して**バスから降ろし**テアゲ**タ。(『新和英中辞典』「-あげる」の項)”における英語表現の場合には、「そのおばあさんをバスから降り**サセテアゲ**タ」を対応させることも可能であるため、(76)のフランス語表現よりは使役表現としての性格が強いと考えられる。
- 42) 中川 1988:497 には、やりもらいの補助動詞を用いて利益・恩恵の授受を表わす日本語表現に対応するフランス語・英語表現においては、主動詞の行為は単一の動詞によって表わされるにとどまり、その対象は目的補語あるいは前置詞句の“pour ~”、“for ~”によって表わすことが可能であるにすぎない旨の記述がみられる。英語と日本語の受益表現について考察を行なったものとしては、水谷 1985:24-29、加賀 1997 がある。
- 43) (80)の「通し**テイタダケル**(=**テモラエル**)」は「通ら**セ****テイタダケル**(=**セテモラエル**)」としても同じである。この点については、「降ろし**テクダサイ**」、「降り**サセテ下サイ**」の近似性について述べた寺村 1982:301 を参照。注 41 で挙げた日本語表現の場合と同様である。
- 44) この点については、『応用言語学事典(「授受表現」の項)』、『言語科学の百科事典(「ボイス」の項)』、堀口 1987:59 を参照。
- 45) 使役と受け身の連続性は、森田 1990:137 が「購買欲をそそらせる/食欲をそそらせる」を「外界の事物によっておのずとおのれの欲望をふるいたたせてしまうという受け手本位の使役である」、「自己の意志いかんにかかわらず、おのずとそうなる受身的使役である」としていることからもうかがわれる。日本語における使役と受け身の連続性について考察を行なったものとしては、さらに西隈 2002 がある。
- 46) 木内 2005:135 は、「**テモラウ**」と「**ラレル**」は主語が受益者か非受益者かで相互補完的に使われる受動形式であるとしているが、このことは受け手の意志性が示されるか否かということと表裏一体をなすと考えられる。
- 47) 『新英和中辞典(“have”の項)』は、使役を表わす“have+目的語+原形”形式に対して「<人に><…>させる、<…>してもらう」のような日本語訳をあてている。
- 48) 中島 1994:311、313、314 に、「V**テモラウ**」と「V(サ)**セル**」の間に構造的・意味的な共通点・相似点がある旨の記述がみられるほか、池上 1981:135-138 には、上記の二形式および「V(ラ)**レル**」の連続性を示唆した記述がみられる。ちなみに、異なる形式間に用法上の連続性を認めていると思われる記述が NHK2014 年 1 月:81 にみられ、“**On ferme** la porte. (ドアを閉める。)”、“**La porte se ferme**. (ドアが閉まる。)”、“**La porte est fermée**. (ドアが閉められる/閉まっている。)”について、動きのイメージ(いわゆる「他動性」を指すと考えられる ※筆者注)がこの順で小さくなっていくとしている。この点については、さらに藤村 1993:175-176、184-185、188-189 を参照。
- 49) このことは、例えば“J’**ai fait** faire une analyse le sang. /私は血液検査をし**テモラッタ**。(『ロベール・クレ仏和辞典』“faire”の項)”における日本語表現をみれば一層理解しやすい。この場合には、通常「ダレニ」が問題とされることはない。
- 50) これに対し六鹿は、“**Éric a fait** visiter Paris **à** ses parents.” 場合には、“à ses parents”を欠くと完結した感じがしないとしている。
- 51) (80)の日本語表現「通し**テイタダケル**(=**テモラエル**)でしようか」は“**Laissez-moi** passer. (『ロベール・クレ仏和辞典』“laisser”の項)”の場合と同じく「通し**テ下サ**

イ」の意味である。

- 52) 郭春貴 2001:235-236 を参照。楊凱榮 1989:166,175 は“請”を使役動詞に分類している。この点については、さらに《实用现代汉语语法》:448-449、奥津・徐 1982:96-97、99-100、103、林彬 2006:36-37、竹島 2012:86-88 を参照。また、周知のように“叫／让・N+V”表現においては使役者と被使役者が対等もしくは使役者の方が目上であるのに対し、“请・N+V”表現においては被使役者の方が目上であるのが一般的である。この点については竹島 2012:88 を参照。中島 1994:315-318 には“请・N+V”、“叫／让・N+V”と「Vテモラウ」との対応関係、各形式の使用条件についての記述がみられる。
- 53) “se laisser+不定詞”については、六鹿 2016:363-364 に、“laisser+不定詞”と同様に放任構文であり、その基本的意味は「…するままにさせておく」であり、不定詞が直接他動詞の場合には「自分が…されるままにしておく」という受け身の意味になる旨の記述がみられるほか、『フランス語ハンドブック』:46 には「されるがままになる」と示されていることから、「Vテモラウ」との対応関係が成立する可能性は低いと推察される。“se laisser+不定詞”については、さらに町田 2015:172-173 を参照。
- 54) 林 1987:49 は、“faire”が「(他者に動作を)作り出す、起こす」の意味を失っている“Je **me fais** toujours gronder par ma mère parce que ma chambre n'est pas rangée. (T. f. f. On en parle aujourd' hui, p. 40)”のような表現例を挙げ、『私』が『母』にはたらきかけて『私』を叱るようにさせたわけではない。つまり文の主体は動作の直接の作因ではなく、他者の行為を受ける者となることが述べられている」として、(107)のようなケースとは異なる非使役の用法と位置づけている。
- 55) 福澤 2000:71 にも、“se faire+inf.”が受動の意味をもつ場合はネガティブな意味で用いられることが多い旨の記述がみられる。“se faire+不定詞”が使役形式とされる点については、さらに戸部 1996:82-84 を参照。NHK2014 年 3 月:77 が“Je me suis fait masser”について「se faire+不定法で『～される』という受け身表現になります」としているのは、受動態よりも使用頻度が高いことを考慮に入れたためかも知れない。この場合の「受け身表現」は、無情物を主語とする「代名動詞の受け身(受動的)用法」とは異なる。藤田 2006:75-76、NHK2014 年 3 月:72-73、78 の記述にみられるように、この用法は「再帰(的)用法」、「相互(的)用法」、「本質的用法(本来的用法)」とともに代名動詞の基本的な用法とされ、例えば“Ça **se mange** cru. (それは生で食べられます。)(藤田 2006:75)”のような形をとる。ちなみに福澤 2001:79-81 には、動作主の働

きかけが動作主自身におよぶことを表わす使役表現が受け身を表わすという現象の、様々な言語における例を紹介している。

- 56) 4.1 でとり上げた「V(サ)セテモラウ」は、使役の「V(サ)セル」に受益の「テモラウ」が付加された形式であり、使役と受け身の働きが一体化した“se faire+不定詞”とは異なるため、ここではとり上げない。
- 57) 佐々木 1997:146 は、同一語省略規則によって受動文が成立するとされる場合の例として“我{叫／让／给}他杀(我)了。”を挙げ、「僕は彼に(僕を)殺させた＝僕は彼に殺された」のような受け身表現への移行過程を示している。ちなみに、《现代汉语八百词》(“叫／让／给”の項)は、“叫／让／给・N+V”表現が使役を表わす場合の“叫／让／给”は動詞、受け身を表わす場合のそれらは介詞(前置詞)であるとしている。
- 58) 佐々木 1997:147-154 は、“叫／让・N+V”表現にみられる使役と受動の曖昧性について論じている。ちなみに劉志偉 2013 は、日本語の受け身表現が中国語の使役表現に訳される現象を「受身と使役の連続性」のあらわれの一つであるとして考察を試み、林彬 2006:35-36 は、中国語話者が“让・N+V”表現を日本語の「V(ラ)レル」表現ではなく「V(サ)セル」表現に置き換えてしまう誤用現象について述べている。成戸 2015:83-84 では“叫／让・N+V”表現のほか、“给・N+V”表現、“请・N+V”表現、“向・N+V”表現などと「N・カラ／ニ Vテモラウ」表現との対応関係についてふれた。
- 59) “Annick voudrait **se faire** acheter une voiture par son père. / アニックは父親が彼女に車を買ってテクレればと思っているんだ。(『21 世紀フランス語表現辞典』:386)”の場合には、下線部を「父親ニ車を買ってテモラえれば」としても表現の前提となる事実に変化がないことから、“se faire+不定詞”に「Vテアゲル／テクレル」表現が対応するケースとの相違についても確認しておく必要がある。
- 60) 藤村 1993:188-189 は、“être+過去分詞”形式をとる受動文においては基本的には被動作主とその結果に文の中心があり、動作主とその活動は背景の方に後退しているとしている。“se faire+不定詞”と“être+過去分詞”の働きの相違については、さらに戸部 1996:74-82、84、95 を参照。
- 61) この点については、『プチ・ロワイヤル仏和辞典(“faire”の項)』、『小学館ロベール仏和大辞典(“faire”の項)』を参照。
- 62) 池上 1981:193 は、「本来的にはくもらう」という意味で消極的な受身にふさわしいはずの have や get がその本来

の意味の枠を越えて、積極的な使役の意味でもごくふつうに使われるようになった」、「have a person come とか get a person to come のような表現は、＜人に来てもらう＞の意味だけでなく、＜人を来させる＞の意味にも用いられる」、「日本語の『セル』の場合とは対照的に、have や get の意味は消極的なものから積極的なものへと変わっている」としている。中川 1988:497 に挙げられている“…, j' ai pensé que je voudrais **faire** asseoir un jour Mère sur un siège pareil. / I told myself that some day I'd like to **have** Mother sit on these seats too. / …, お母さんも一度こんな椅子に座ら**シテヤリ**たいと思いました。(『潮騒』)”からは、“have”の強制度が“make”ほど強くないこと、“faire”が必ずしも強制使役を表わさないことが読みとれる。この点についてはさらに福澤 2000:70-71 を参照。『新英和中辞典(“get”の項)』が“**get**+目的語+**to do**”の働きについて示した「＜…に＞＜…＞させる、勧めて[説いて]＜人に＞＜…＞させる」からは指示使役を表わす働きを有することがみてとれ、“**get**+目的語+過去分詞”の方が「**Vテモラウ**」との対応関係が成立しやすいと推察される。ちなみに戸部 1997:26 には、“faire+inf.”が表わす主語と動作主の間には多様性がみられ、同形式は両者の間に関係が築かれることだけを言語化しているのに対し、英語においては主語と動作主の間にいかなる関係が築かれるかによって使役動詞が使い分けられる旨の記述がみられる。

- 63) (106)'、(122)については『クラウン仏和辞典(“faire”の項)』、『プチ・ロワイヤル仏和辞典(“faire”の項)』を参照。六鹿 2016:358 は、再帰代名詞が間接目的語となっている例として“Fouquet **s' est fait** bâtir un superbe château à Vaux-le-Vicomte. (フーケはすばらしい城館をヴォ・ル・ヴィコントに建てさせた。)”のほか、“**se faire** faire un costume(スーツを仕立ててもらう)”などを挙げている。
- 64) 成戸 2016 b:35 で紹介した盧濤 2000:193 の記述にみられるように、“替”は“为”とともに「間接的な受益関係」を結ぶものである点において、「直接的な受益関係」を結ぶ“給”とは異なる。「間接的な受益関係」、「直接的な受益関係」については、成戸 2016 b:38 を参照。

引用文献

R. M. V. Collick・日南田一男・田辺宗一編著『新和英中辞典』、研究社(4版1995)。
 朝倉季雄『フランス文法事典』、白水社(1955)。
 天羽均・大槻鉄男・木内良行・佐々木康之・多田道太郎・西

川長夫・山田稔・Jean Henri Lamare 編『クラウン仏和辞典』、三省堂(5版2001)。

池上嘉彦 1981.『「する」と「なる」の言語学 — 言語と文化のタイポロジーへの試論 —』、大修館書店(5版1988)。

泉邦寿 1989.『フランス語、意味の散策 日・仏表現の比較』、大修館書店。

『NHK ラジオ まいにちフランス語』2014 年 1/3 月号, NHK 出版。(略称 NHK)

奥津敬一郎・徐昌華 1982.『「〜てもらう」とそれに対応する中国語表現 — “请”を中心に —』、『日本語教育』第 46 号, 日本語教育学会, 92-104 頁。

奥津敬一郎 1987.「使役と受身の表現」, 山口明德編集『国文法講座 6 時代と文法 — 現代語』, 明治書院, 232-251 頁。

加賀信広 1997.「日英語の受益構文と意味役割」, 筑波大学現代言語学研究会編『ヴォイスに関する比較言語学的研究』, 三修社。

郭春貴 2001.『誤用から学ぶ中国語 — 基礎から応用まで —』, 白帝社。

木内良行 2005.『大阪外国語大学言語社会研究叢書 第 3 輯 フランス語の統語論研究 関係文法の限界と可能性』, 勁草書房。

倉石武四郎『岩波中国語辞典 簡体字版』, 岩波書店(1990)。

Claude ROBERGE・Solange 内藤・Fabienne GUILLEMIN・加藤雅郁・小林正巳・中村典子『21 世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356 項目 —』, 駿河台出版社(2版2004)。

小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修編集『応用言語学事典』, 研究社(2003)。

奥水優 1985.『中国語の語法の話 — 中国語文法概論』, 光生館。

小宮千鶴子 1984.「使役表現の広がり — 日英語間の発想のずれと指導上の問題 —」,『日本語教育』第 53 号, 日本語教育学会, 149-161 頁。

佐々木勲人 1997.「中国語における使役と受動の曖昧性」, 筑波大学現代言語学研究会編『ヴォイスに関する比較言語学的研究』, 三修社, 133-160 頁。

重信常喜/島田昌治/橋口守人/須藤哲生/工藤進/山岡捷利/ガブリエル・メランベルジェ編『コンサイス和仏辞典』, 三省堂(3版2003)。

島田昌治/林田遼右/ティエリー・トルード編集『会話作文 フランス語表現辞典』, 朝日出版社(1985)。

『小学館ロベール仏和大辞典』, 小学館(1988)。

鈴木良次編『言語科学の百科事典』, 丸善株式会社(2006)。

竹島毅 2012.「使役表現の教え方と日本語訳について」,『日本語と中国語のヴォイス』, 日中対照言語学会(白帝社),

- 82-99 頁。
- 竹林滋・吉川道夫・小川繁司編『新英和中辞典』, 研究社(6版 1994)。
- 田辺貞之助著『フランス文法大全』, 白水社(2007)。
- 田村毅・倉方秀憲・恒川邦夫・吉田城・牛場暁夫・東郷雄二・石井洋二郎・春木仁孝・支倉崇晴・福井芳男・大木充編『プチ・ロワイヤル仏和辞典[改訂新版]』, 旺文社(1996)。
- 中條屋進・丸山義博・G. メランベルジェ・吉川一義編集『ディコ仏和辞典』, 白水社(2003)。
- 恒川邦夫・牛場暁夫・吉田城編『プチ・ロワイヤル和仏辞典』, 旺文社(3版 2010)。
- 寺村秀夫 1982.『日本語のシンタクスと意味 第I巻』, くろしお出版。
- 戸部篤 1996.「現代フランス語における使役構文 *se faire* + 不定詞の記述的研究」,『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第11号, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, 69-99 頁。
- 戸部篤 1997.「使役構文の記述的研究 *Faire* + 不定詞構文と *Laisser* + 不定詞構文について」,『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第12号, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, 19-40 頁。
- 中川良雄 1988.「授受補助動詞構文 — 日・英・仏語対照 —」,『研究論叢』第32号, 京都外国語大学, 492-515 頁。
- 中島悦子 1994.「日中対照研究 — 使役・『てもらう』・『よう(に)』構文と“譲”構文 —」,『國文目白』第33号, 日本女子大学国語国文学会, 311-319 頁。
- 成戸浩嗣 2015.「日中対照研究方法論(1) — “給・N+V”表現と“N・格助詞”を用いた日本語動詞表現(上) —」,『現代マネジメント学部紀要』第3巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 77-86 頁。
- 成戸浩嗣 2016 a.「日中対照研究方法論(2) — “給・N+V”表現とそれに対応する日本語使役表現、受益表現(上) —」,『現代マネジメント学部紀要』第4巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 27-40 頁。
- 成戸浩嗣 2016 b.「日中対照研究方法論(2) — “給・N+V”表現とそれに対応する日本語使役表現、受益表現(下) —」,『現代マネジメント学部紀要』第5巻第1号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 27-40 頁。
- 成戸浩嗣 2018.「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上) — 中国語・日本語の視点から —」,『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 29-49 頁。
- 新倉俊一・朝比奈諒・稲生永・井村順一・富永明夫・宮原信・山本顕一著『フランス語ハンドブック』, 白水社(1996)。
- 西隈俊哉 2002.「受身と使役における連続性についての一考察」,『南山大学国際教育センター紀要』第3号, 南山大学国際教育センター, 40-49 頁。
- 西村牧夫・鳥居正文・中井珠子・飯田良子・曾我祐典・菊地歌子・井元秀剛・増田一夫編訳『ロベール・クレ仏和辞典』, 駿河台出版社(2011)。
- 林迪義 1987.「*se faire* + *inf.* 構文について」,『フランス語学研究』第21号, 日本フランス語学研究会, 49-55 頁。
- 久松健一 2002.『英仏日 CD 付 これは似ている! 英仏基本構文 100+95』, 駿河台出版社。
- 福澤清 2000.「使役と受動 — A Cross-linguistic Approach —」,『文学部論叢』第67号, 熊本大学文学会, 59-72 頁。
- 福澤清 2001.「使役から受身へ」,『文学部論叢』第71号, 熊本大学文学会, 69-82 頁。
- 藤田裕二 2006.『フランス語 DVD でアン・ドゥ・トロワ!』, 朝日出版社。
- 藤村逸子 1993.「フランス語の受動態とその周辺 — 日本語との比較対照 —」,大橋保夫・藤村逸子・春木仁孝・林博司・梶茂樹・宮下明信・長澤宣親・西村淳子・大木充・田口紀子・東郷雄二著『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, 169-193 頁。
- 堀口純子 1987.「『〜テクレル』『〜テモラウ』の互換性とモードの意味」,『日本語学』1987年4月号, 明治書院, 59-72 頁。
- 前田直子 1989.「『使役受動態』の意味と用法」,『言語文化研究』第7号, 東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会, 25-32 頁。
- 益岡隆志 2001.「日本語における授受動詞と恩恵性」,『言語』2001年4月号, 大修館書店, 26-32 頁。
- 町田健 2015.『フランス語文法総解説』, 研究社。
- 水谷信子 1985.『日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版。
- 三宅徳嘉・高塚洋太郎・田島宏・大賀正喜・山方達雄編集『現代和仏小辞典』, 白水社(1994)。
- 目黒士門 2000.『現代フランス広文典』, 白水社。
- 森田良行 1990.『日本語学と日本語教育』, 凡人社。
- 楊凱榮 1989.『日本語研究叢書 3 日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』, くろしお出版。
- 劉志偉 2013.「日本語の受身表現と使役表現の連続性をめぐる — 中国語との対訳から —」,『日中言語対照研究論集』第15号, 日中対照言語学会(白帝社), 77-94 頁。
- 林彬 2006.「日中両言語における使役構文の対応関係に関する考察 — 中国人学習者の誤用分析を中心に —」,『日本語・日本文化研究』第12号, 京都外国語大学留学生別科, 34-54 頁。
- 山本直文/林憲一郎/鎌田博夫/伊東英/ミシェル・ロシエ編『最

新フランス語大辞典』, 三笠書房(1983)。

盧濤 2000. 『中国語における「空間動詞」の文法化研究 — 日本語と英語との関連で — 』, 白帝社。

六鹿豊 2016. 『これならわかる フランス語文法 入門から上級まで』, NHK 出版。

《法汉词典》, 上海译文出版社(1979)。

广州外国语学院法语专业《新简明法汉词典》, 商务印书馆(1983)。

刘月华・潘文娛・故耕《实用现代汉语语法》, 商务印书馆(1983)。

吕叔湘主编《现代汉语八百词(增订本)》, 商务印书馆(1999)。

用例出典

三島由紀夫『潮騒』, 新潮文庫。(Meredith Weatherby 訳 *The Sound of Waves*, Charles E. Tuttle. /G. Renondeau 訳 *Le tumulte des flots*, folio.)

(原稿受理年月日 2018 年 10 月 11 日)